

“Proceedings of the Fifth Pacific Science Congress Canada, 1933.”

The University of Toronto Press, 1934

(畑井新喜司 ナマズの地震予知に関する研究)

本書は 1933 年にカナダで開かれた太平洋学術会議の会議録です。本学生物学教室の初代教授・畑井新喜司氏による、ナマズの地震予知に関する研究報告が掲載されています。ラットやミミズの研究で高い評価を受けた研究者ですが、ナマズの地震予知研究でも有名で、1931 年頃からこの研究に取り組んでいました。

この時の実験方法はナマズの水槽を置いた机を朝昼晩の 3 回ノックしてナマズの反応を記録し、実際の地震発生との関係を探るものでした。ナマズがノックに敏感に反応した場合は数時間後に地震が発生、反応しない場合は発生しない確率が高く、その的中率は 80% という結果が出ました。結論では「ナマズは地震が記録される 7,8 時間前にノックの音に対して敏感になる」「そのメカニズムは不明だが、ナマズが地電流の変化を感じ取っていることが要因の一つのようであり、地震が発生する前には何らかの振動が生じている可能性がある」と結ばれています。

参考文献：

畑井新喜司の生涯/蝦名賢造著,西田書店,1995

生物学教室五十年史/東北大学理学部生物学教室五十年史刊行委員会,1980

■畑井新喜司 はたい・しんきし (1876-1963)



(肖像画：東北大学総合学術博物館 HP より)

動物生理学者。青森生まれ。東北学院卒。1899年に渡米してシカゴ大学で学び、ペンシルベニア大学・ウィスター研究所の教授となる。1921年に帰国し、東北帝大・理学部教授として生物学教室の創設にあたった。1924年浅虫臨海研究所、1934年パラオ熱帯生物研究所の設立に尽力し、それぞれ初代所長を務める。のちに東京家政大学長となる。

大学は教わる場所ではなく、自分で考え創作する場として、常に若い研究者を激励していた。

「それは君、大変おもしろい。君、ひとつやってみたまえ」が口癖だったという。

■太平洋学術会議

太平洋地域の科学者が集まり学術研究の国際協調を象徴する機関で、1920年にハワイで開催された”Pan-Pacific Science Conference”に端を発する。第一次世界大戦後は、科学者が連帯して研究と平和を促進する目的を持った国際組織が数多く作られた。